2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
経営学部 国際ビジネス学科	准教授	金　良泰
最終学歴	学　位	専門分野
明治大学大学院 経営学研究科 博士後期課程修了	経営学博士	経営学

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

本学の建学精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を実現し、国際社会に貢献するグローバル人材の育成を目指す。

（目標）

本学の教訓である「真面目」を貫き、真に信頼される人格を鍛え上げ、国際社会や地域社会に奉仕・貢献できる人間性豊かな人材を育成する。

（方針）

本学が掲げる「オンリーワンを、一人に、ひとつ」という新たなコンセプトとするブランディングを通じて、世界を繋ぎ、世界をリードするグローバル人材を育成する。

（計画）

現在、経済のグルーバル化、日本企業の海外進出に伴ってグローバル人材の重要性が増している。グローバル人材とは「日本人としてのアイデンティティや日本の文化に対する深い理解を前提として、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解などを身に付けてさまざまな分野で活躍できる人材」である。今後、国際社会や地域社会に奉仕・貢献でき、世界を繋ぎ、世界をリードする人材育成に取り組みたい。具体的には上述した能力やスキルに加え、幅広い教養や深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークの能力を備え、世界を視野に入れてビジネスを展開する人材育成を目指す。その際、本学の建学精神が掲げる「信頼性」と教訓の「真面目」を貫き、世界で輝く「オンリーワンを、一人に、ひとつ」を教育現場で実現したい。なお、グローバルビジネスに関わる専門知識の習得については「講義」「ケーススタディ」「創意的思考」等の方法を積極的に活用して理論と実践が学べる機会を広げたい。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

国際経営論、国際貿易論、アジア経済論、基礎演習Ⅰ、卒業研究準備、卒業研究指導Ⅱ

（後期）

東邦プロジェクトA、企業とグローバル人材、グローバルビジネス論、基礎演習Ⅱ、
卒業研究指導Ⅰ、卒業研究指導Ⅲ

○教育方法の実践

昨年も新型コロナ感染病拡大防止対策が敷かれそのガイドラインに従って授業を行った。授業形式は「対面」「オンライン」「オンデマンド」でも対応できる「ハイブリッド」授業を想定して計画した。楽しい授業、学べる喜びを感じる授業を最優先課題と定め、学習効果の向上を目指して「ハード」

と「ソフト」の両面で改善を図った。ハード面では教室のレイアウトの変更、グループワーク導入、役割分担の明確化などを通じて参加率の向上を図った。ソフト面においては「ハイブリッド授業」向けの授業デザインに注目し力を入れた。個人(グループ)発表、簡単なクイズやゲームの要素の導入、教材研究、コンテンツ開発、マルチメディア機器の活用、最新の海外事例などを取り入れ好奇心を刺激した。授業資料は事前に Teams に搭載し予習可能な状況を作った。また授業後には簡単なクイズや課題を出し、学んだ内容をもう一回確認する作業を行った。

○作成した教科書・教材

全ての講義は、テキストを指定しなかった。授業資料は主に自分が作成したスライドで行った。資料は関連する専門書、学会発表資料、新聞・雑誌等から収集してデータを収集して作成した。また、重要と思われる場合は、コピーをとって配布した。参考教材は以下である。

後藤将史『グローバルで勝てる組織を作る 7 つの鍵』東洋経済新報社、2012
後藤宗明『RESKILLING』日本能率協会マネジメントセンター、2022
浅川和宏『グローバル経営入門』日本経済新聞出版、2020
井原久光『テキスト経営学(第 3 版)』ミネルヴァ書房、2021
江夏健一『理論とケースで学ぶ国際ビジネス』同文館出版、2020
関口倫紀『国際人的資源管理』中央経済社、2020
坪谷邦夫『図解人材マネジメント入門』DISCOVER、2020
永井孝尚『MBA 必読書』KADOKAWA、2020
中川功一『はじめての国際経営』有斐閣ストゥディア、2015
三谷宏治『経営戦略全史』DISCOVER 2013
毛利正人『図解海外子会社マネジメント入門』東洋経済新報社、2017
守屋貴司『グローバル人材の育成とタレントマネジメント』昇洋書房、2020
吉原英樹『国際経営』有斐閣アルマ、2020

○自己評価

「ハイブリッド」型授業を想定して授業計画を立てることは簡単ではなかった。しかし、ほとんどの授業が「対面」で行われたことは良かったと思う。特に、東邦プロジェクトと基礎演習Ⅱでは、「名古屋グランパスのグローバル化」の課題に取り組み、一定の成果をあげたことは印象深い。毎回、グループごとに進歩状況を確認し、フィードバックと修正作業を重ねてスライド形式で完成させた。完成されたスライドは皆の前で発表する時間を設け、達成感、満足度、コミュニケーション能力を高める貴重な時間として活用した。

今後、授業に関する専門的な知識だけでなく、どのように教えるかという教育力やテクノロジーの活用術を備え、すべての学生が自主的に参加できる「よりよい」授業の実現に向けて頑張りたい。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

グローバル EV シフトと日本の自動車産業の戦略

○目標・計画

（目標）

本研究は、CASE と環境規制を受け、自動車産業の中でも最も変化が著しい EV 分野に絞り、日本の

自動車メーカーの動向を考察する。

（計画）

これまで日本の自動車産業は、国際競争力が高く、部品・素材、販売・整備、物流・交通、金融等幅広い分野に関係する戦略産業として経済や社会への貢献が大きい存在だった。具体的には自動車など運送位階の出荷額は 70 兆円と製造業全体の 2 割に相当する。貿易黒字額は 15 兆円と資源輸入額 18 挑円の第班を賄っている。雇用に関しても、自動車メーカーから販売店・整備工場・輸送、ガソリンスタンドまで様々な業種や大手から中小零細まで様々な規模の事業者を含め約 550 万人と就業人口の 1 割に相当している。本研究では、日本における巨大牽引産業である自動車産業が経営環境変化にどのように対応しているのかを分析することで自動車産業をはじめ多領域に及ぶ他産業の未来を予測する上で有意味をもつ。

○2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

金良泰・イムチェソン・ジョンジンソン・キムドンファン・ヨインマン・キムヨンド・キムヒョンチョル『低成長時代の日本経済』博文社、2017.3

尚麗華・金 良泰外 4 人「中国と韓国における少子化問題の現状と対策」『地域創造研究業績』No.35、2022.12

（学術論文）

金 良泰・島袋隆志「グローバル EV シフトと日本自動車産業の戦略」『韓日経商論集』第 95 巻、2022.5

金良泰・イムサンヒョク「日本の素材・部品産業の競争力源泉と研究開発パートナシップに関する研究」『日本近代学研究』68 号、2020.5、285-312 頁

金良泰「労使関係の変化と人事制度改革の胎動」、『韓日経商論集』86 号、2020.2、129-156 頁

金良泰・イムサンヒョク「日本における企業防災現状と支援対策研究」、『日本近代学研究』66 号、2019.11、227-246 頁

金良泰・ハンソンス「日本の電機電子産業における失われた 20 年の再検討」、『日本近代学研究』64 号、2019.5、213-238 頁

金良泰・イムサンヒョク「A 自動車における賃金体系変更論議と労働者の賃金公正性に関する研究」、『韓日経商論集』78 号、2018.2、125-141 頁

金良泰・イムサンヒョク「韓日における製造基盤産業の現状と人材確保及び育成に関する研究」、『日本近代学研究』57 号、2017.8、611-630 頁

金良泰「熟練と賃金制度 - A 自動車における熟練養成のための賃金制度の模索」、『専門経営人研究』19 号、2016.12、1-18 頁

金良泰「日本の労働市場と雇用慣行の変化」、『日本近代学研究』52 号、2016.5、271-296 頁

金良泰「韓国 BANWOL 工業団地におけるものづくり産業の現状」、『大韓経営学会誌』28、2015.6、1747-1763 頁

（学会発表）

金　良泰「日本の労働市場の規制緩和と人材マネジメントの変化」大韓経営学会秋大会、2015.11

金　良泰「韓国自動車産業の経営戦略と人材マネジメント」沖縄大学国際ワークショップ、2019.2

（特許）

無

（その他）

無

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

無

○所属学会

韓日経商学会

過労死防止学会

東アジア経済経営学会

日本労務理論学会

○自己評価

2022 年度は研究活動に専念できた 1 年であった。学内個人研究テーマについては学会誌に投稿・掲載することができた。また、学内の研究プロジェクト(地域創造研究所)にも参加し、研究成果(共著)を出した。以下は掲載論文、共著、学会(研究会)発表論文、国際学会へのコメントの内容である。

1. 学会誌掲載及び共著出版
   (1) 金 良泰・島袋隆志「グローバル EV シフトと日本自動車産業の戦略」『韓日経商論集』第 95 巻、2022.5
   (2) 尚麗華・金 良泰外 4 人「中国と韓国における少子化問題の現状と対策」『地域創造研究業績』No.35、2022.12
2. 学会研究会発表
   (1) 第 6 回 東アジア経済経営学会 研究会発表(2022.11.19)
   「グローバル EV シフトと日・韓自動車産業」
3. 国際学術大会討論
   第 36 回 韓日経済経営国際学術大会 討論者(2022.8.25-27)
   -韓国における貧困と格差、そして世代間とジェンダー対立について-

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

学術情報センター運営委員会、国際交流センター運営委員会に積極的に参加し、協力・寄与できる分野を模索する。

（計画）

私は、学術情報センター運営委員会、国際交流センター運営委員会に所属している。まず、学術情報委員会ではポストコロナ、DX 時代に対応して図書館、ラーニングコモンズの役割・機能の検討、リモート授業の支援策などを検討する。私は学生たちから得た情報やニーズをまとめ、改善策を探りたい。第 2 に、国際交流センター運営委員会においては、中長期計画を立って海外提携校（主に韓国の大学）の開発、韓国の研究者（経営学部レベル）と交流、日韓研究者による共同研究プロジェクトなどの国際交流事業を模索したい。

○学内委員等

学術情報センター運営委員会、国際交流センター運営委員会

○自己評価

毎月開催される学術情報センター運営委員会に欠席せず参加した。DX 時代に対応して図書館、ラーニングコモンズの役割・機能に関わる課題に対して情報共有と改善方向などを模索した。また、国際交流センター運営委員会ではメンバーからのご協力と支援を頂き、韓国所在の 2 校と国際交流 MOU を締結することができた。一つはアンヤン大学校であり、もう一つは啓明文化大学である。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

日本の中部圏の歴史・経済・社会・文化・生活・企業に関する知識を学び海外へと発信したい。

（計画）

グローバル時代において、今後海外との人的交流がますます増えると予想される。海外（特に韓国などの東アジア）に向けては愛知県の歴史と文化を発信し、名古屋の人々には海外のことをつたえ、国際交流への大切さとまたその場を広げる機会を模索したい。

○学会活動等

2022.8.25～27 まで韓国の釜山で開催された韓日経済経営国際学術大会に討論者として参加した。お世話になった多くの日本と韓国の研究者と交流を深めた。韓国の先生とは名古屋と愛知東邦大学についてお話しでき有益な時間となった。また、2022 年 11 月 19 日には、第 6 回　東アジア経済経営学会の研究会において発表する機会を得た。「グローバル EV シフトと日・韓自動車産業」のテーマで発表し、ヒュンダイ自動車の経営戦略について関心が高く、日韓比較において様々なコメントを頂いた。

○地域連携・社会貢献等

自分が特別研究員として所属している「沖縄大学地域研究所」の共同研究員(島袋隆志教授)と協力して学会論文を完成・掲載した。

○自己評価

国際学術大会に参加して海外の研究者らと交流を深め、専門領域における最新の研究動向について学んだことはとても良かった。今後、研究領域での人的ネットワークを大事にしながらそこで得られた研究成果は教育現場で活かしていきたい。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

今後、学外研究活動に力を入れ社会貢献、地域連携を深めていきたい。

2022 年度には韓国所在の 2 つの大学と国際交流 MOU を締結することができた。一つは 4 年制大学のアンヤン大学校であり、もう一つは 2 年制大学の啓明文化大学である。MOU を締結するまで、韓国の大学には名古屋と愛知東邦大学についての情報を発信し、本学にはアンヤン大学と啓明文化大学についての詳細な情報を交換した。今後、両国の国際学術交流が実を結べるよう頑張りたい。

Ⅵ　総括

2020 年は、大学教員として、教育と研究そして大学業務に従事し、たくさんの事を学んだ 1 年だっ

た。コロナ感染防止対策が敷かれる中で「ハイブリッド型」授業を想定して授業計画を立てたので学生も教職員も大変な時期であったと思う。そんな中でも多くの学生は笑顔を忘れずに勉学に励み、友人との良い関係を結びながら成長していく姿をみると本当に良かったと思う。自分としては授業の質と満足度を高める方法などは無いかと悩みながら教材研究、授業デザイン、コンテンツ開発などに多くの時間を費やした。今後、授業に関する専門的な知識だけでなく、どのように教えるかという教育力やテクノロジーの活用術を備え、すべての学生が自主的に参加できる「より良い」授業の実現に向けて頑張っていきたい。

研究活動においては、掲載論文 1 本、共著 1 本、国際学術大会のコメンテーター、東アジア経済経営学会の月例研究会での発表など満足する成果をあげた。研究成果ならびに学会活動で得た知識・情報は教育現場で積極的に活用していきたい。

最後に、国際学術交流においては韓国所在の 2 校の大学と国際交流協定を結ぶことが出来た。陰で支えて下さった国際交流委員会メンバーに感謝したい。今後、実を結ぶ国際学術交流ができるように頑張りたい。

以　上